

国語学習プリント

date : 年 月 日

学習内容 :

年 組 番

蠍座カレンダー

薄井ゆうじ

氏名



蠍座カレンダー

薄井ゆうじ

ついで、すっかりしていた。まさかそんなところにいるなんて思わなかった。ずっと寝不足だったし……いや、言い訳なんかしない。起きてしまった事故はもう、取り返しがつかないのだから。踏んでしまったものは踏んでしまったのだ。

荒野を歩いていて。何日も何日も、ぼくは荒野を歩き続けていた。深夜、気温が下がって涼しくなった時に仮眠を少しとるだけで、寝不足と空腹と喉の渇きに耐えながら、幾日の昼と夜を歩き続けたことだろう。いくら歩いててもぼくの目の前には荒野が地平線まで果てしなく続いている。この旅に出るから何か月が過ぎただろう。空腹にも寝不足にももう慣れた。そんなものは覚悟のうえで荒野に出たのだから。ある午後、ぼんやりと歩いていた時、蠍を踏みつけてしまったのだ。荒野には毒をもった昆虫や爬虫類がたくさんいるので足もとには注意していたつもりだった。もちろん短靴を履いていたので踏んだくらいでは刺されることはない。だが何かを踏んだと思った瞬間、ぼくは異様な音を耳にしてそこに立ち止まった。

「*+△〇+」
初めはなんの音なのかわからなかった。耳を澄ますと何か小さく叫んでいるのだった。

「謝れ！」
小さな蠍が足もとで、小さな声で精いっぱいになっているのだった。

「わざと踏んだわけじゃないよ。」
ぼくのそのひと言が蠍を怒らせた。怒らせた。「なんだって？」
「蠍はぼくを見上げています。」
「わざとじゃないって？」

「そうだよ、すっかりしていたんだ。」
「この広い荒野で、あんたの足がおれを踏みつける確率について考えたことがあるか。」

「どいう意味だ？」
「つまりそいうことだ。わざと以外にそれが成立する確率はきわめて低い。おかげでおれの足は一本、ねじ曲がってしまった。どうしてくれる。」
「謝るよ。」

「遅い。」
「蠍は小さくもなっている。」
「謝るタイミングがきわめて遅い。」
「そんなことを言われても……。」
困ってしまった。蠍の怒りはわかるが、ぼくだってこんなところで蠍を踏みつけてしまったなんて思わなかったのだ。第一蠍は日中はあまり歩かない。熱い日差しを避けて石の陰などにいて、夜になってからそこを歩き回るのである。

「昼間歩いているほうが悪い。おまえは今、そう思ったな。」
「別に。」
「そう思った。おれにはわかる。」
「ああ、思ったよ。蠍が昼間歩き回るなんてどうかしらる。」
「じゃあ、おまえはどうなんだ。こんなところを昼間歩き回っている。まともじゃない。」
「ぼくは旅人だ。」
「ほう。」
「蠍は言った。旅人なら蠍を踏んづけてもいいわけだ。」
「そうは言っていない。ぼくは困り果てた。どうしろって言うんだよ。」
「おれの足は傷ついた。おれもおまえの足を傷つける。」

「そう言ったかと思うと蠍は大きくジャンプしてぼくの右足の太ももに跳び着き、そこを刺した。ちくりという痛みとともに、しびれるような感覚がぼくの全身を覆った。」
「これで、おあいこだ。」
「そんな……。」
「あばよ。」
赤い蠍は悠然と去っていく。「せいせい青蠍でも捜すんだな。」
「どいう意味だ……？」
「ふん。」

「この旅も、ぼく自身の命も。覚悟を決めて目を閉じ

た。できれば苦しみたくない。そればかりを考えてそこにしゃがみこんでいた。どのくらいそでそうしていただろう。ゆっくりと目を開けると、荒野の果てに日が沈んでいくところだった。

「まだ生きている。」
体はだるかったが、意識は少しはつきりしてきたような気がする。というより、毒による朦朧とした感じに慣れたのだらう。

やがて日は落ちて、辺りは薄暗くなってきた。まだ立ち上がる勇気はなかった。どうせ死ぬんだ、歩き回る必要なんてない。そう思って大地の反対側から昇ってくる大きな月を見つめていた。あたりは静かだった。

「せいぜい青蠍でも捜すんだな。」
さっき蠍が言っていた言葉をぼんやりと思い返していた。青い蠍？ 何かの比喩だろうか、青色の蠍がどこかにいるのだろうか。もしそれが実在するとして、なぜそれを捜せと蠍は言ったのだらう。

かさりと音がして振り返るとそこにハイエナが立っていた。ぼくの背後、すぐ近くだった。ぼくは思わず身をすくめて身がまえた。

「怖がることはない。」
ハイエナが言った。「とって食うつもりは、ないからね。」

「そででぼくが死ぬのをじっと待つつもりだな。」

「どいうして？」

「月を眺めていただけだ、きれいな満月だね。」

「……………」

「ぼくは返事をしなかった。ハイエナは確かにネクタイを締めてきちんとした紳士のかっこうをしているが、外見にだまされたりはしない。ハゲタカと同じように、彼らは死臭に群がって生きているのだから。」
ハイエナはしばらく月を眺めていたが、いきなりぼくのほうに向き直った。

「きみは何か困っているみたいだね。……そうか、蠍に刺されたんだな。このあたりの蠍は、毒のまわりが遅い。だが必ず死ぬ。青い蠍が見つかるというけどな。」
「そう言ったらハイエナは立ち去ろうとした。」
「待て。青い蠍って、なんの意味だ。」
「知らないのか。」

ハイエナは不思議そうにぼくの顔を見た。その後

国語表現

date : 年 月 日

学習内容 :

年 組 番

蠍座カレンダー

薄井ゆうじ

氏名



に大きな月があつて、なんだか絵はがきを見ているよ
うな現実感のない光景だつた。
「教えてくれないか。青い蠍ってなんのことだ。」
「そんなことも知らないで、どうしてここにいるんだ
無知にもほどがあるな。」
「ぼくは旅をしていて、たまたまここを通りかかっ
ただけだ。そしたら赤い蠍に刺された。」
「ここには赤しかない。」
「青い蠍は？」
「どこかにいる。刺されて七日以内にそれを探し出
せば助かるという言い伝えがある。」
「迷信か……。」ぼくはがっかりした。「そんなこと
だと思つたよ。」
「ただの迷信なんかじゃない。実際に助かつたやつも
いる。信じるかどうかは自由だけど。このまま何もせ
ずに死ぬよりいいと思わないか。」
毒におかされる者にわずかな期待を抱かせる。そう
いう効果は確かにあるだろうけれど、それ以上のも
のではないはずだ。
「いないものを捜すつもりはない。」
「青い蠍は小さな湖のほとりにいる。じゃあな。」
ハイエナは気だるそうにあくびを一つすると、月が
昇つてきた方角へ去つていった。月が照らすハイエナの
影が荒野に長く伸びて、いつまでもゆらゆらと揺れて
いた。
青い蠍か、とぼくは思った。それは湖のほとりにいる
とハイエナは言った。だが旅に出て以来、湖なんて一
度も見たことがない。ここには湖どころか川も井戸
も、水の気配すらないのだ。
——どうしようか。
石に腰かけたまましばらく考えていた。やがて立ち
上がる、ゆつくりと歩き始めた。湖は喉の渇きを潤
してくれる、そして青い蠍は毒を癒してくれる。その
魅力には勝てなかった。ハイエナの話がたとえ嘘だと
しても、水のあるところにたどり着けば、毒は癒えな
くても死ぬ前に思いきり水が飲める。それだけでも
いいのではないか。
七日以内に青い蠍を見つければ、とハイエナは言った。
というところは少なくともあと七日間は命があるとい
うことではないだろうか。
希望という言葉がまたこの世にあるとしたら、ぼく

はそこにかすかな希望の光を見た。それに向かつて月
明かりに照らされながら、夜の荒野を歩いてもなく歩
き始めた。
どれくらい歩いただろうか。明け方近くになった。月
はもう西に傾きかけていた。風がどことなく湿りけ
を帯びているように感じて、ぼくは立ち止まった。前方
の地面がうっすらと光っているのが見えた。光りなが
ら波打っている。
——水だ。
小さな湖がそこにあった。薄暗い中でも向こう岸が
見えるほどの小さな湖で、池と呼んだほうが的確か
もしれない。湖面は緩い風にあおられてひっそりと波
立っている。ぼくは岸辺に走り寄り、その水を手です
くつた。
「飲むのか。」と声が出た。
ひざまずいた岸辺の、すぐ近くからその声は聞こえ
た。ぼくは水をすくつた手を止めて辺りを見た。足
もとに蠍が一匹いて、ぼくを見上げていた。蠍は、深
い空のように透きとおつたブルーの色をしている。
「青い……蠍。」
「どうかしたか。」
「捜していた。」
「おれを？ なるほど、やられたというわけだ……
それより、その水を本当に飲むのか。」
「喉が渇いている。飲めないのか？」
「そんなこともない。勝手に飲めばいいさ。」
ぼくはもう一度手で水をすくい直してそれを一気
に飲み干した。塩辛い味がした。それでも喉の渇き
に勝てなくて何杯かをすくって飲んだ。
「飲めば飲むほど喉が渇く。そういう水さ。」
蠍が言つた。おれは飲んだ。いくら飲んで塩辛いだ
けで、喉の渇きは癒されなかった。
「だからやめたほうがいいと言つたんだ。」
「やめたほうがいいなんて言わなかった。」
「おれが悪いのか？」
蠍は明らかに軽蔑したような目でぼくを見た。ぼ
くは水を飲むことをあきらめてそこにしゃがみこん
だ。喉の渇きはますますひどくなつていく。
「助けてくれないか。蠍に刺された。」
「おれは刺さない。」
「違う、赤い色の蠍だ。青い蠍なら助けてくれると聞

いた。」
「そういうことを言うやつが、まだいるのか。たぶん
ハイエナだな、あいつが言いそうなことだ。確かに助け
てやれないこともない。」
「どうすればいい？」
「とても簡単だ。おれがおまえを刺す。それで毒は
中和される。」
「毒が二倍になるといふことはないのか。」
「心配するな。完璧に治る。」
「じゃあ、刺してくれ。」
「おいおい。」と蠍は言った。「困つた人だ。おれは、罪
のない人は刺さない。あなたには恨みもないし怒りも
感じない。そういう人を刺すなんて、できるわけな
いじゃないか。」
「ぼくを助けるための。刺すだけでいい。」
「親切心で刺せると思つたか。この毒は敵に向か
つて使う。それ以外の使い方はない。」
「どうすればいい？」
「そつたな……。」蠍は考えこんでしまった。やがて
顔を上げると「おれの敵になれ。」と言つた。「そした
ら刺せる。芝居じやだめた、本気になつておれを殺す
気てかかつてこい。そうしたらおれも応戦する。」
「そんな……、すぐには無理だ。」
「おれを殺せ。その直前におまえを刺してやる。」
無理だつた。明け方の湖のふちで青い蠍と話をし
ているうちに、ぼくはとても穏やかな感情になり、闘争
心も欲も恨みも怒りも、そういう感情はどこかへ消
し飛んでしまつていた。もうすぐ自分が死ぬかもしれ
ないという恐怖感からも、いつのまにか静かに解放さ
れていた。
「このままでいい。」ぼくは言った。「このまま、じつと
待つだけがいいよ。な気がする。」
「死を待つのか。」
「みんなそうしてる。人はみんな生まれた瞬間に蠍
に刺された。いつ毒がまわつてくるのか、だれも知ら
ない。毒を回避するためにだれかを恨んだり殺した
りはできない。」
「ほう。」青い蠍が言った。見ると、静かに涙を流して
いるよつた。夜明けだね。
地平線が明るくなつてきた。
「もうすぐ、夜が明ける。」と、ぼくも言った。